

「ジャーナリズム」の 構築過程に関する一考察

——不確実性下における「信頼」概念を手掛かりに——

山口 仁



▶ 1 問題の所在:ジャーナリズムを社会的行為・行為主体として分析するために

本稿の目的は、社会的行為およびその行為の主体である「ジャーナリズム」を分析するための理論的概念について検討することである。筆者はかつて、社会的構築主義（特に社会問題の構築主義）および現象学的社会学の発想に依拠しながら、ジャーナリズムを「事件・出来事に関して報道・論評・解説するメディア・コミュニケーション¹とその行為主体のなかで、社会的に『ジャーナリズム』であると解釈されたもの（山口2012:76）」と定義した。この定義はその中に「ジャーナリズム」を含んでおり同義反復的ではあるが、この定義に基づくことで構築主義的視座に立つジャーナリズム研究には、以下の二つの研究領域があることを示した。

- ① 事件・出来事がメディア・コミュニケーションによってどのように報道・論評・解説されたか、その影響要因と帰結について考察する（過程①:メディア・コミュニケーションによる現実構築過程）
- ② 各種メディア・コミュニケーションとそれを行う主体が、どのように「ジャーナリズム」であると解釈されたのか、その影響要因と帰結について考察する（過程②:メディア・コミュニケーションに関する現実構築過程）

過程①、すなわちメディア報道によって事件・出来事に関する現実が構築されていく過程については、すでに多くの研究が行われている。過程②に関しては、筆者はそれが理念上存在し、また具体的事例の中にも確認でき、さらに昨今のメディア環境において顕在化・活性化していると指摘したが、顕在化・活性化した過程自体に関する言及は十分ではなかった（山口2012参照）、つまり特定のメディア・コミュニケーション（およびその主体）が「ジャーナリズム」として構築されていく過程を考察するための概念の検討が不十分であった。本稿ではそのための概念として「信頼」を取り上げ、若干の考察を行いたい。

▶ 2 社会的構築物として「ジャーナリズム」を捉えるアプローチ

(1) 「ジャーナリズム」の構築性への言及

ジャーナリズムを構築主義的にとらえることとは、換言すればジャーナリズムの「本質」

を認めないということである。それは研究対象としてのジャーナリズムの固有性を認めず、相対化してとらえる視座でもある。もっともこのような視点が、従来のジャーナリズム論に無かったわけではなく、批判的なジャーナリズム論には少なからず存在してきた。

例えば、著書『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム』の中で、林香里はジャーナリズム・ジャーナリスト（の定義）の流動性を指摘している。林は、ジャーナリズムは本来的には多様な存在形態がありうるにもかかわらず、男性中心の既存のマス・メディア組織・業界ではその多様性が失われてきたと指摘し、既存のジャーナリズム概念を脱構築し、代替的なジャーナリズム概念の構築を指向している。ジャーナリズムのあり方として、今日の社会に広く受容されている論理は「中立・客観報道主義」である。たしかに、この論理は現在のマス・メディアを中心するジャーナリズム活動を成立させる枠組みとしては有効である。しかし林によれば、現在のジャーナリズムは極度に専門主義的、新自由主義的であり、それが「オトコ」の論理に基づいた支配的なジャーナリズムを形成していると指摘する。一方で、非正規・フリーランスらの「ジャーナリスト」による活動の中にも「ジャーナリズム的」なるものを見出し、対抗的なジャーナリズムの構築の可能性やその実践について論じている（林2011参照）。現代社会においては、ジャーナリストは専門的職業、ジャーナリズムは専門的組織として理解されている。しかし米国をはじめ、マス・メディア産業の斜陽化が進み、非正規雇用の記者の増加している現代社会では、ジャーナリストの条件として専門的職業であることを挙げるのは、規範面以外の観点からも今後は困難になっていくだろう³。

ジャーナリズムのあり方の多様性については、既存の報道スタイルを批判し新たなあり方を模索する中에서도示されてきた。その一つが「ニュー・ジャーナリズム」で、1960年代の米国において、それまで主流だった公的機関の発表情報をもとにする客観主義的な報道スタイル（無署名性の高い報道）を批判しながら登場してきた。ニュー・ジャーナリズムのあり方について、玉木明は以下のように述べている。

無署名性の言語とは、活字メディアにおける普遍性、伝える機能を担うものであって。そこでは「何を、誰に、いかに、伝えるか」というメディア自体が抱える命題から「何を、誰に、いかに」という人間的要素がかぎりなく漂白されて、「伝える」という機能だけが抽出され、拡張される。すでにみてきたとおり、ニュー・ジャーナリズムとは、そのメディアの普遍性、機能化を拒否し、メディアの個性性を要求してきたありうべきもう一つのジャーナリズムの形態、ジャーナリズムの自覚態、対自存在にほかならなかった（玉木1992：267）

ニュー・ジャーナリズムでは、事件を描写する際、登場人物の内面を強く描写しようとするため、小説の手法を用いることもある。それはそれまでの報道のスタイルとは大きく異なっていたが、現在では「ありうべきもう一つのジャーナリズムの形態」として一定程度、受容されている。

また、文字以外の情報形態によるコミュニケーション（例えばテレビによる映像情報伝達）に新たなジャーナリズムの形態を見出す議論もある。

テレビドキュメンタリーという表象の方法自体が、患者の症状や患者の生活、水俣を睥睨し、君臨するかのようなチツソの工場、そこから流される大量の排水などの映像を必要とする。そうした映像を説明する言葉が配分されていくことで、水俣病事件の全体的構図を語る言説が編制されていったともいえるだろう。…（中略）…カメラのとらえた映像、マイクのとらえた音声によって、水俣病事件の構図が裏付けられながら表象されるようになる（小林2007：363）

映像では、カメラや録音機が有する記録機能が「事実」を切り取る証拠能力として機能する。映像、音声、音楽、図画などのマルチモダリティな表象であることが、公害問題としての水俣病事件、およびそれを正当化する当時の日本社会で支配的価値観に対する対抗的言説を作り出すことを可能にした。水俣病事件は、映像がもつ力を端的に示した事例である⁴。このような指摘は、従来の文字による、そして客観主義的な報道姿勢にもとづく

主流のジャーナリズムのあり方を相対化し、対抗的なジャーナリズムの構築に貢献したと読み替えることができる。

そもそも、現在において主流とされる客観報道主義的なジャーナリズムもまた、プロフェッショナルリズムとしての体裁を維持するため、ルールや職業倫理として確立してきた歴史的経緯がある。そしてこれらのルールや倫理は、ジャーナリズムの定義の構成要件として機能し、様々な批判に晒されつつも、現在まで一定の地位を確保している（大井1999：26-30参照）。とはいえ、新たなジャーナリズムを求めようとする動きは常に生じていることも確かであり、それを踏まえれば可能態としてのジャーナリズムは、常に多様であるといえる。

ジャーナリズムの多様なあり方について大井真二は、エリート・ジャーナリズム（固い話題を中心とした客観的報道のスタイル）、ポピュラー・ジャーナリズム（ヒューマン・インタレストを中心とした、センセーショナルなスタイル）、ニュー・ジャーナリズム（素材は事実に基づくが、文学的なスタイルや表現形態をとるもの）、調査ジャーナリズム（埋もれた事実を掘り起こして主として政治・経済的権力の不正を暴く企画記事）、唱道的ジャーナリズム（特定の主義主張を担う主観的な報道）、タブロイド・ジャーナリズム（犯罪・性・スキャンダルを素材とするもの）、ニュース・ショー（テレビのワイドショー）、インフォテイメント（インフォメーションとエンターテイメントの合成語）、トークショー（観客入りのスタジオで有名人にインタビュー）などを列挙している（大井2004:42-45参照）。またインターネットが登場・普及してからは、周知のようにネットを活用した新しいジャーナリズムのあり方について、期待感を伴う議論が展開されてきた。

メディアを用いて社会的な事件・出来事を伝える行為、およびその主体という点に関しては、「ジャーナリズム」の共通性はある。ただ人々は様々な規範・基準に基づいて、様々なメディア・コミュニケーションを「ジャーナリズム」として定義してきたし、それらの中には一定の人々の間で共有され、「ジャーナリズム」として社会的に構築されてきたものもある。

(2) マス・コミュニケーション過程における「現実」の構築

ここではジャーナリズムの構築に関する上記の議論を、コミュニケーション過程に当てはめて考えてみる。そのために、まずはH.D.ラスウェルの「コミュニケーションの分析単位」に関する議論に依拠しながら、コミュニケーション過程を以下のように分類する（ラスウェル1948=1968:66参照）。

- ① 送り手（誰が）
- ② 情報内容（何を言うか）
- ③ 情報の通路（メディア）
- ④ 受け手（誰に対して）
- ⑤ 効果・影響

この分類は、メディア・コミュニケーション（マス・コミュニケーションも含む）を、①送り手が、②情報内容を発信し、それが③メディアを介して、④受け手に到達し、受け手が何らかの⑤効果や影響を受ける一連の過程として把握している⁵。そして後述するように、「事物は人々の相互行為を通じて社会的に構築される」という構築主義的視座⁶は、コミュニケーション過程の①から⑤のすべての単位に適用できる。

上記①から⑤のうち、メディア・コミュニケーション研究の中でもっとも構築主義的視座が適用されているのが②情報内容である。例えば(マス・)メディアが伝える情報内容(特

にニュース)の客観性を相対化し、それらが事件・出来事の一部の事実を切り取り編集したものであること、そして編集されたニュースをもとに集団・社会の構成員の間で事件・出来事に関する現実が構築されることについては、疑似環境論やメディア・フレーム論などで言及されてきた⁷。

だが構築主義的視座は、**情報内容**以外のコミュニケーション過程にも適用できる⁸。例えば③**メディア(の技術)**に関しても適用可能である。人々は、ただ単にメディア技術を利用するというよりは、その技術がどのようなものなのかを自分なりに理解・解釈しながら、すなわち意味付けを行いながら、それをを用いて(メディア・)コミュニケーションを行っている(北田1998参照)。そこではメディア技術に関する現実がメディア利用者の頭の中に、もしくは利用者間で構築されている。例えば、人々がモバイル・メディアを「有害メディア」として解釈し、その解釈が社会で共有され、規制が制定され、メディアの利用者は逸脱視され、結果としてコミュニケーションのありかたにも変化が生じる。このような現象を、構築主義的視座に基づいて考察することもできる⁹。

同様に、④**受け手**に関する現実もまた構築される。マス・コミュニケーションの送り手は、自分たちが発信する情報の受け手がどのような存在なのかを(無意識な場合もあるが)認識しながら、情報を発信している。また受け手の側も、自らがどのような存在なのかを理解しながら情報を受容している。そこでは一つのカテゴリーとしての「オーディエンス」が構築されている。ときには、保護されるべき受け手として「子ども」に関する現実が、保護者や教育者などの第三者によって構築される場合もある¹⁰。

そして⑤**効果・影響**についても同様である。例えばマス・コミュニケーションの効果影響モデルの「第三者効果仮説」は、自分以外の第三者はマス・メディアの影響を受けるが、自分は影響を受けないという認識を人々がもつ傾向があると主張する説(仮説)である。この仮説が正しいかどうかは議論の余地がある。とはいえ、人々が「マス・コミュニケーションは受け手に対してこのような影響がある」という現実を構築していること自体は確かである。このような「現実」は、「有害コンテンツ」が青少年に与える「悪影響」について、社会的な論点形成される過程で構築されると考えられる。

以上、コミュニケーション過程の各单位に構築主義的視座を適用しうることを示してきた。構築主義的視座とは、人々が日常生活世界で行っている説明(第一次的概念)を説明すること(第二次的概念)である。(メディア・)コミュニケーション論の研究者が、人々が行うコミュニケーション過程について専門的な説明をする以前に、人々はその過程について日常的な概念で説明しながらコミュニケーション行為を遂行しているのである。

この議論を踏まえると、「ジャーナリズムの構築」とは、メディア・コミュニケーションにおける①**送り手**(多くの場合はマス・メディア組織)に関する現実構築であると読み替えられる。そして、それぞれの①から⑤に関する現実を構築する主体は、以下のようなものであると考えられる。

- (a) コミュニケーションの送り手 (による構築)
- (b) 受け手 (による構築)
- (c) 第三者 (による構築)
- (d) 送り手, 受け手, 第三者を含む集団・社会 (における間主観的な構築)

この(a)から(d)の分類を踏まえると、例えば①**送り手**に関する現実構築には、(a) **送り手自身**、すなわちマス・メディア組織が自己言及的に自らの活動を論じること、(b) **受け手**、すなわちオーディエンスによるマス・メディアの論評・批判(北田前掲論文、平井2012参照)、(c) **第三者**、例えば政府によるマス・メディア批判やジャーナリズム論の論者によ

るものがある。そして (a) から (c) の間で、マス・メディアに関する現実が共有されていくことで、(d) 集団・社会において、送り手（としてのマス・メディア組織）に関する現実が間主観的に構築されていく。

(3) 構築・構成の過程に注目する目的

ある研究領域で構築主義的視座をとることでのどのような議論の展開が期待できるかは、同視座を採用する目的意識に大きく依存する。以下では、社会問題の構築主義の議論を手掛かりに、構築主義的視座の分類を試みる¹¹。

まず構築主義的視座は、既存の構築物（多くの場合は支配的とされるもの）を脱構築する目的で採用される場合がある。その目的は大別して、支配的な構築物が「客観的」な現実を反映したものではないことを批判するため、もう一つの目的は代替的な構築を行うためである。前者の例としてモラル・パニック論のように、既存の構築物（ある社会問題に関する現実）が「客観的」な現実を反映していないことを批判し、客観的なデータに基づく対抗的な現実を構築する目的で、同視座が採用される。もっともこの場合、構築主義的視座に基づく指摘は、「客観的」データに基づく現実構築をするための端緒であり、構築主義的視座を採用するのは既存の現実を批判するためである。すなわち構築主義的視座は、「客観的ではない」現実に対して適用されるにとどまる。

後者についても、構築主義的視座を採用する理由は、対抗的な現実構築を実現するために、自明視された現実の正当性を脱構築するという意図がそこに含まれている。この場合も前述のように客観的か否かという基準とは異なるが、何らかの規範・基準によって構築物の序列化が行われている。すなわち規範・基準を満たしていない既存の構築物を脱構築し、より正当な代替的構築がそこでは試みられている。この場合も、批判対象の正当性を相対化するために構築主義的視座が用いられている。これらの脱構築を目的とした構築主義的な視座の適用は、脱構築する対象を自ら構築しようするものとの間の比較を行うため、価値観、規範、基準への言及が不可欠になる¹²。

また現実の構築過程を記述したり、事例横断的に一般的な説明をするために、構築主義的視座が採用される場合がある。中河伸俊らは、構築主義的視座を採用する目的を以下のように述べている。

正しい立場性や自己反省やあらゆる“事実”への懐疑ではなく、エンピリカルな探求…参加者がその活動を組織化するためにしていること、考えていること、使っている者を観察し、それを社会学という別の実践的関心に沿って再構成すること（あるいは再特定化）し、参加者の活動の文脈に投げ戻すこと（平・中河 2006：319）

ただし「記述」から一般的な「説明」へと展開していく過程では、何らかの構築行為（再構成という形で）が不可避である。中河らは、これを「社会学という別の実践的関心に沿って」行うとしている¹³。この「実践的関心」の中には、構築過程を規定したり、その過程に影響を与えたりする諸要因の分析も含まれるだろう。すなわち、特定の集団や社会の中でなぜある特定の現実が優先的に構築されていくのかを説明することで、その集団やその社会で共有されている解釈図式や価値観、いわばその社会で共有されている「常識」や「イデオロギー」を明らかにしていくというものである¹⁴。

そして、より理解社会学や現象学的社会学に近い目的意識に基づく構築主義的視座も想定できる。人々の行為の多くは意識的に遂行される以上、その行為を分析するためには行為者もしくは複数の行為者たちの間でどのような現実認識が共有されているのかを把握する必要がある。脱構築を目的とするわけでも、構築過程の分析を通じて一般的な説明を指向したり、社会の価値観を抽出したりするのではなく、行為そのものを分析するために構

築主義的視座を適用するのである。メディア・コミュニケーション過程には、送り手が伝える情報によって事件・出来事に関する構築される現実と、コミュニケーション過程の各单位（②以外の①～⑤）に関する現実が構築されるという、二重の構築過程が存在している。あらゆる行為が遂行される過程で現実が構築されるという意味、そしてその行為の一種であるコミュニケーションによって伝えられる情報に基づいて受け手や受け手が構成する社会の間で現実が構築されるという意味、コミュニケーションを考察する場合にはこの二重の現実の構築過程をとらえる必要がある。

▶ 3 「ジャーナリズム」の構築と信頼

メディア・コミュニケーションに関する現実構築について、社会学理論の領域ではニクラス・ルーマンが、社会システム論・ラディカル構成主義の文脈から、マス・メディアに関するリアリティ構築について論じている。ルーマン理論をメディア研究に応用した北田の言葉を借りれば、そこでは「メディアがどのような伝達様式を持つかを社会（言説）の側が定義し、その自明化された伝達様式への態度を構えたうえで受け手がメディア・テキストの意味解釈を行う」という多層的な意味解釈過程が存在している（北田 1998, 94 参照）¹⁵。もっとも、ルーマンのマス・メディア論に対しては、その紹介者・訳者である林香里が「具体的な実証研究に結び付かない（林 2005：196-201 参照）」と批判している。しかし、社会システム論から「マス・メディアのリアリティ構築」へとたどりついたルーマンが別の分野で一般社会について提示した概念は、マス・メディア（メディア・コミュニケーション）に関する現実構築をより詳細に分析する際にも有用ではないかと考えられる。特に、複雑化した現代で社会が成立するための要件としてルーマンが提示した「信頼」という概念は、昨今の複雑かつ不確実になっているメディア環境におけるジャーナリズムに関する現実の構築過程を考察するのに有用であると考えられる。

（1）未来の不確実性への備えとしての信頼

人間は、様々な対象についての情報を受け取り、まずは頭の中でその対象に関する現実を作り上げる。この際、個人が対象に関する情報を直接入手する場合と、何らかの媒体（メディア）を通じて間接的に入手する場合とがある。アルフレッド・シュッツは、人々が行為を展開する世界を、「社会的直接世界（いま・この世界）」「同時代世界（いま・ここではない世界）」「先代世界（過ぎ去った過去の世界）」「後代世界（これから訪れる世界）」に分類した（シュッツ 1932=2006：215-323 参照）。これらの中で、人間が直接的に情報入手できるのは「社会的直接世界」のみである。過去である「先代世界」や、現在ではあるが直接的に体験できない「同時代世界」に関しては、何らかのメディアを介して情報を受容しなければならない。さらに「後代世界」とはこれから生じる未来の世界であり、「先代世界」や「同時代世界」よりも一層不確定かつ不確実であり、それを間接的に体験することすら出来ない（森 1995：444-445 参照）。

人々が情報を入手し、それをもとに構築する現実には多様な可能性があるにもかかわらず、人々は特定の現実を選択的に構築している。またメディア・コミュニケーションの場合には、情報入手に際して他者が介在するため、その他者が伝える情報が正しいかどうかその人にとって有用なものかどうか、その場で判断するのは困難を極める。その際に機能するのが「信頼」である。信頼について、ルーマンは以下のように述べている。

将来は、人間の持つ現在化の能力の手に余るのである。にもかかわらず人間は、このような常に複雑な将来を伴った現在において生きていかねばならない。従って人間は、自らの将来を現在の尺度で不断に剪定し、複雑性を縮減していかなばならないのである（ルーマン 1973=2010：19、傍点は引用者）。

「将来」は、様々なことが生じる可能性がある。受け手からみれば、自分がいまメディアから入手した情報が間違っていると判明する、もしくはいまとは違う新しい情報が入手できる可能性などである。受け手である人々は、そのような可能性があるにもかかわらず、その可能性を「剪定」し、いま入手可能な情報をもとに現実を構築していく。いわゆる「メディア・リテラシー論」では、情報の受け手は、多様な情報源を精査し、メディアの情報を鵜呑みにしないことが求められるが、人々の日常世界（そして研究の領域であっても）では、特定の媒体が信頼され、その情報が信頼性の高いものと受容されている。その信頼は、例えその媒体の過去の実績の蓄積によるものであっても、その媒体が将来「正しい情報」を伝えてくれるかどうか確実に保証するわけではないにもかかわらず、である。

近年では、情報源やメディアの多様化が進んでいる。そのような状況では「技術的に生み出される将来の複雑性に耐えうるためにこそ、一層多くの信頼が要求されてくる（ルーマン 1973=2010：27）」のである。複雑な技術の蓄積、機能集団間のつながりで成り立っている現代社会では、人はその一つ一つの技術や集団について完全なる知識を持っているわけではない。完全な知識を持つとすればそれだけで多くの時間がかかる。人々は完全な知識がないままであっても、一旦はそれらを不問に附して信頼し、利活用しているのである。テレビのオーディエンスはテレビ番組の内容が（多少は偏っていたとしても）全くの嘘ではないと信頼して、その情報を受容している。新聞の読者も記事内容に記者個人の解釈が入り込んでいるかもしれないが、それなりに信頼して受容しているのである¹⁶。

こうして、事件・出来事に関する情報を伝えるメディア・コミュニケーションやその送り手が信頼されていくことで、彼ら、そして彼らの行為が「(信頼に足る)ジャーナリズム」として構築される。ジャーナリズムとは、ある種の信頼が付与されたメディア・コミュニケーション行為、ないしはその主体であると言うことができる。逆に、構築された信頼が揺らぐときに、そのメディア・コミュニケーションは批判の対象となる。例えば、誤報や虚報（捏造）といった不祥事は、メディア組織への信頼を大きく低下させる。信頼されている「ジャーナリズム」であるほど、その信頼を失う事態は問題視されるのである¹⁷。

(2) 信頼性の構築・構成の歴史性・間主観性

「信頼に足るジャーナリズム」を構築していくあり方は、本来的には多様であり、個人によって、時代によって、社会によって異なる。しかしある時代や社会（小集団）では、その信頼構築のあり方が間主観的に共有され、その結果「ジャーナリズム」に関する現実も社会の中で共有されている。

現実の構築過程に作用し、その方向性を規定するものをどのようにとらえるかは、様々な研究系譜があるが、ここでは現象学的社会学の文脈で考えていく¹⁸。現実が社会的に構築されるときには、以下のような過程を経ると考えられる。まず、人々は自らをとりまく環境から直接的に、もしくはメディアを通じて間接的に情報を入手しそれを解釈する。人々はその解釈を他者に伝え、彼らと解釈を共有していく。もしくは多くの人々が同じ情報を受け取ることで、同じ解釈に至る場合もある。解釈とは、解釈の枠組みである知識を用いて、入手した情報の中の特定の側面を際立たせ、それを典型的に認識することである。換言すれば解釈とは、特定の枠組みの中で入手した情報を典型的に理解することである。アルフレッド・シュッツはこのような過程を「類型化の過程（シュッツ著作集第3巻：314）」と呼んだ。

そして、情報を類型化する方法は複数ある。人々は、知識の量やその多様性に応じて、さまざまな類型化をすることができる。人々は様々な解釈の枠組みである類型を有しており、それらは「類型化の体系（シュッツ著作集第3巻：318）」を形成している。

人々は多様な類型化をすることができるが、どの類型化がより適切（有意）であるかを意識的・無意識的に判断し解釈の範囲を自ら規定している。このように、どの類型が有意

なのかを規定しているのが「レリバンス（有意性）の体系」である。ある解釈が行われる過程では、レリバンスの体系に規定されながら類型化が行われる。人々の解釈を規定するこれらの体系は、あわせて「レリバンスと類型化の体系（シュッツ著作集第3集：318）」と呼ばれている。

この体系は各個人が持っていると同時に、部分的には社会的に共有されているものであり、過去から継承された社会的遺産でもある。（シュッツ第3集：318参照）。レリバンスと類型化の体系が社会の中で間主観的に共有されているから、もともとは個人が主観的に行った解釈でも、他者と間主観的に共有することができる。そしてある事物に関する個人的解釈が、他者と共有され、社会の中でも共有されていくことで、現実には社会的に構築・構成されていく。レリバンスと類型化の体系は、人々が生きている日常生活世界を含むあらゆる現実の構築・構成の過程に作用している。

なお信頼とは、不確実な将来の可能性を縮減しつつ、無意識的・意識的に「覚悟」を決めることである。ここでいう「覚悟」とは、ある対象が自分の期待・予測の通りにならなかった場合でも、それ自体の責任にはせずに、挽回の回路を保証することである。（大庭2010参照）。この際、どのようなものが信頼に値すると解釈することができるかということに関しても、レリバンスと類型化の体系化が作用する。人々が自分が生きてきた中で、様々な対面的コミュニケーションもしくはメディア・コミュニケーションによって情報ならびに知識を習得し、頭の中にレリバンスと類型化の体系、換言すれば「これは信頼できるメディアである」という現実を構築するための基準を作り上げている。それによって未来を見積もる。すなわち人々がどのようなメディアを「ジャーナリズム」として信頼し、どのような情報を「正確な情報」として信頼するのもレリバンスと類型化の体系によって規定されている。

（3）狭い範囲の間主観性：ネットの登場

レリバンスと類型化の体系は、個々人が独自に有するものというよりは、他者と、集団内で、そして社会全体で共有されている。また各個人が有しているこの体系も、様々な経路によって、短期的・長期的に作られてきたものである。家庭、地域、学校、宗教的な集団、またはメディアによるコミュニケーションを通じて、各個人は社会化の過程でこの体系を形成し、他者と一定程度共有している。戦後の日本社会は長らく、統一的な学校教育やマス・コミュニケーションによる一方向的かつ広範な情報伝達により、広い規模で情報・知識の共有が行われ、レリバンスと類型化の体系に関しても、広い共有が達成されてきたともいえる¹⁹。

一方で、インターネットの普及によってそれまではマス・コミュニケーションの受け手にとどまっていた人も、容易に情報発信できるようになってきた。さらに、他者の情報発信が可視化されたことで、マス・コミュニケーションによるものとは異なる現実が構築される可能性が生じた。

現実の構築過程では、特定の現実が構築される代わりに、それ以外の現実の構築可能性は排除される。この排除もまたいくつかの段階に分類することができる。S. ルークスが主張した多次元の権力論では、人々の目標の達成過程は「利益認識」「利益表明」「利益実現」の三段階に分けられている（ルークス1974=1995参照）。この発想を現実の構築過程に当てはめれば、①特定の解釈をする段階、②その解釈を他者に表明する段階、③他者の解釈と対立した場合にそれを排除して自らの解釈をおし通す（説得する）段階に分けることができる²⁰。ネットの普及によって生じた情報発信主体の可視化の進展で大きな変化があったのは、②の段階であると考えられる。例えば「沈黙の螺旋理論」の中でも指摘されていたことだが、人々は自分の見解が少数派であると認識したときには、その意見の表

明を抑える傾向にあるとされる。ネットの普及によって、人は容易に自分と同様の意見に出会うことが可能になった。そして同様の意見の持ち主と場所を異にしても相互にコミュニケーションすることができるようになった。

一方で、ネットのコミュニティは集団分極化する傾向にあるといわれる（サステーン2001=2003参照）。特にSNSのようなメディア環境では、利用者はその情報源をカスタマイズし、自分に心地よい情報のみを選別して受容することができる²¹。そこでは、各々自分（達）の信頼するメディアからの情報にもとづいて、自分たちの集団だけで共有できる現実を作り上げる、つまり自分たちだけが信頼するメディア（≡ジャーナリズム）を作り上げることも可能になる。そうして自分たちだけが信頼する「ジャーナリズム」が個別に存在し、集団間で相互に了解不可能な状況になっていくことも考えうる。

このような状況でも、誰もが判断を共有できる事実（例えば客観性の高いデータ）があれば、それをもとにして現実構築を共有していくことも可能かもしれない。しかし社会が複雑化し、そこで起こる事件・出来事の不確実性が高まっている昨今では、そもそも「客観性の高いデータ」そのものが入手困難である。したがって共通の現実を構築することはより困難になりつつあると考えられる²²。

▶ 4 結びにかえて

本稿では、行為としてのメディア・コミュニケーションやその主体が「ジャーナリズム」として構築されていく過程を考察するために、構築主義的な視座を再検討し、「信頼」概念について若干の考察を行ってきた。もっとも実際に行われてきたメディアに関する調査を見るかぎり、新聞をはじめとするマス・メディアに対する人々の信頼度が大きく減少したと判断することは難しい。信頼度は、むしろインターネット（や雑誌）の信頼度の方が低い。その一方で「特定の勢力に偏った報道をしているから」、「政府や財界の主張通りに報道するだけだから」という理由で新聞へ不信を募らせる見解も存在している。これらの意見を持つ層は、社会全体から見れば、大きな影響力を持っているとはいえない。しかし、ときとして個人に対して大きな影響力を行使する場合もあるかもしれない。

コミュニケーション過程に関する現実の構築過程が、理念型として存在することはさまざまな研究者によって指摘されてきた。ただ、いままではマス・コミュニケーションによる情報伝達が当然の状況だったので、その過程が顕在化するのには限定された事例にとどまっていた。またネットが登場した現在でも、調査データが示すように、マス・メディアの信頼性が直ちに揺らいでいるわけではない。

しかし一方、マス・メディアの地位は（社会全体ではなく）特定の集団の中では揺らぐこともありうる。そしてマス・メディアの信頼性が揺らいでいる中で、特定の集団内のコミュニケーションによって、集団内部で特定の現実が支配的に構築されることもありうるだろう。

本稿は、信頼概念を手掛かりにコミュニケーション過程全般における現実構築を考察してきた。そして、ジャーナリズムを「(信頼される)メディア・コミュニケーション」と人々によって構築されたものであるとして位置付けてきた。ただ、信頼概念についてはより詳細な分類が存在する。今後は信頼概念の一層の検討と、ジャーナリズム研究への適用可能性について考えていきたい。

●注

1. 英語圏では「対面的コミュニケーション (face to face communication)」に対してメディア (媒体) を使用するコミュニケーションは「mediated communication (メディアエイトッド・コミュニケーション: 媒介されたコミュニケーション)」と表記されるが、本稿では日本語として定着している「メディア・コミュニケーション」を使用する。
2. C.クリスティアンは、今日の報道のあり方、すなわち中産階級的なプロフェッショナルリズムに基づくジャーナリズム観は1890年ころに成立したが、近年ではその見直しが行われていると指摘している (Christian 2004: 41 参照)
3. 本稿には「ジャーナリズムはアマチュアリズムであるべき」という規範を提示する意図はない。昨今の経済的状況やメディア環境では、専門職以外の人々もジャーナリズムのような活動を行うことが可能になり、かれらの活動と従来のジャーナリズムの活動との境界線が徐々に曖昧になりつつあるのではないかと指摘しているだけである。それが好ましい状況かどうかは別問題である。ジャーナリズム (ジャーナリスト) の定義の多様性については、大井真二 (2004) のほか、Zelizer (2009) も参照。
4. 映像の持つ力について、桜井は「すでに現代におけるリアルなものは、フィクションを通さなければ表現できないほど傷ついています。多くの事実が事実を歪曲し、多くのフィクションが事実を救い出してきた (桜井 2001: 192)」と述べているが、これは客観報道主義のジャーナリズム像に対する批判的見解と理解することもできるだろう。もちろん、映像の持つ力は「センセーショナルリズム」をもたらす点では負の側面がある。しかし少なくとも文字情報とは異なる形態のジャーナリズムを可能にすることだけは確かである。
5. コミュニケーションは送り手と受け手の双方向の流れとしてもとらえられるし、社会構造・文化構造に規定されながら行われるので、この図式は単純化しすぎているともいえる。ただ、コミュニケーション過程における構築主義的視座の適用対象を明らかにするために、便宜的に使用することにする。
6. 社会的構築主義の基本的な命題については、バー (1995=1997: 特に1-25を参照)。
7. メディア・コミュニケーション研究以外の構築主義的研究 (例えば、社会問題の構築主義) がメディアを論じるときも同様である。すなわち、メディア上である社会問題がどのように報じられたのか (語られたのか) という観点から、ニュースの内容の分析が行われるという研究スタイルが一般的であった。
8. 構築主義的視座が、行為全般に適用できることについては山口 (2011) 参照。人々が行為の遂行過程で、意味を構築していることについてはウェーバーの理解社会学、それを現象学の知見に基づき発展させたシュッツの議論にもみられる (シュッツ 1932=2006 参照)。
9. あるメディアの存在やそのメディアの利用者 (特に若者) が社会問題として人々に理解・解釈されることについては、モラル・パニックの事例としても研究対象にもなっている (Springhall 1998 参照)。
10. この問題は、「オーディエンスの構築性」として議論されている (小林 2003 参照)。
11. 構築主義的アプローチの中の差異・対立は、いわゆる「構築主義論争」を契機に明確化されていったように思われる。特に、「コンテクスト派」と「厳格派」という区別は、日本に社会問題の構築主義を紹介した中河らによって論じられたこともあって、一般化しているといえる。構築主義論争については平・中河編 (2000, 2006を参照)。
12. ただし、代替的な構築を目指す研究の中には、赤川が「現実がそのような形で構築されているのかを説明する段階では、ほぼ例外なく、分析者が前提とする権力や支配構造、政治的利害といった変数が自明視される。つまり現実の被構築性 (= 恣意性・可変性) を指摘する一方で、自らが構築した説明変数の恣意性や可変性には目を向けようとしないのである。マルクス主義やフェミニズムを問わず、墮落したイデオロギー分析は、おおむねこのような傾向に陥りやすい (赤川 2005: 136)」と指摘するような問題があることも忘れてはならないだろう。
13. 構築主義論争では、構築主義的な研究の中に見られる構築性が問題視された。このような批判は、研究対象を「構築されたものにすぎない」という文脈で行われる場合には、自分自身の活動もまた「構築されたものにすぎない」ということになってしまい、それは自己批判につながる。したがって、構築されたもの同士の序列化がそこでも必要になる。それに対して中河らは社会問題を構築しようとする行為と、その行為を分析しようとする行為とは「別のゲーム」であるとしている (平・中河編 2006 参照)。ただし中河らは「別のゲーム」が、何を目的としているものなのかについてはそれほど明確にしていらないと思われる。
14. 赤川学はある特定の現実構築が「なぜ」可能だったのかという「Why」の問いを失った構築主義的視座には批判的である (赤川 2006: 17-18 参照)。
15. (マス・) メディアをめぐる意味解釈過程の二重性 (多重性) に部分的に言及しているとみなせる研究として、藤田 (2009)、佐幸 (2011) などを挙げることができる。
16. これは「送り手」に対してだけでなく、メディア技術に対する信頼もまた同様である。ネット利用者は「送ったメールが相手に届くだろう」とメールの仕組みをある程度は信頼しながら、利用している。
17. ただし人々の予想を裏切るようなことがあったとしても、それがすぐに信頼の崩壊につながるわけではない。信頼とは予想通りの未来にならなかったときに、その対処の仕方まで想定されている状況のことをいう (ルーマン訳者解説。大庭 2010: 221 参照)。しかし「期待外れ」の事態が繰り返し生じ、その対処も期待通りに行われないことが繰り返されると、信頼は徐々に失われていく。
18. 以降の箇所は、拙稿をもとにまとめている (山口 2012: 44-45 参照)。
19. この点を「マス・メディアに関する大きな物語 (とその変容)」ととらえることもできるだろう (大石 2012 参照)。
20. なお、どのような状態をもって「(現実が) 構築された」とみなすかかどうかについては、例えば①個人の頭の中、②個人間、③各集団・各共同体の中、④各集団・各共同体を含む大きな社会、などに分類することができる (西原 1998: 113 参照)。また田中耕一は「構築主義者は『観察・記述』が、実は実践なのだ」と単純に言い換えてしまう。…観察・記述 = 構築の無限の連鎖という背理を自ら抱え込むことになってしまうのである (田中 2003: 104-

- 105)」と述べている。「構築された」というのは、それを思考できたときなのか、表明・表象できたときなのか、それとも他を排除して支配的な存在になったときなのかなどに分類して考える必要があるだろう。
21. 近年の事例で言うと、東日本大震災後のジャーナリズムをめぐる動向は、本稿の問題関心に近いものであるといえる。地震後も、余震の発生可能性や原発事故の推移に関して、日本社会の未来はそれ以前よりも不確実かつ予測不可能なものになった。放射能汚染に関しても、その影響をめぐっては様々な説が提起された。既存の情報源、政府やマス・メディアによる情報に対する信頼性も揺らいだ。事件・出来事に関しても、それを伝える活動（コミュニケーション）に関しても、確実なものではなくなったという認識が社会で（一時的に）共有された。そのような状況下で、一部の人はマス・メディア以外の情報源を信頼し、マス・コミュニケーションとは異なるコミュニケーション過程を信頼した。マス・メディア批判を伴いながら、事件・出来事に関する情報がネット上で流通した。しかしマス・メディアが伝える情報に間違いがあったように、あるいはそれ以上にネット上の情報にも問題があった。そして現在、ネット上では相互に対話することが不可能なほど、意見が異なるグループが形成されている。
22. 一例として挙げられるのが、原発事故後の放射能汚染に関する問題であるといえる。なおその毒性が不確実な汚染問題に関するメディア報道については、山口（2009）参照。
23. 公益財団法人新聞通信調査会が2013年に行った調査では、信頼できるメディアとして、「NHK テレビ」が1位、「新聞」が2位になっている。また新聞への信頼感が「高くなった」とするその理由については、「情報が正確だから」30.6%、「根拠に基づく情報を報道しているから」25.5%、「公正・中立な立場で報道しているから」24.2%という結果になっている（同報告書、1-3参照）。

●引用・参考文献

- 赤川学（2005）「言説の歴史を書く」盛山和夫他編『＜社会＞への知／現代社会学の理論と方法（下）』勁草書房、125-144頁。
- （2006）『構築主義を再構築する』勁草書房。
- V.バー著、田中一彦訳（1995=1997）『社会構築主義への招待』川島書店。
- C.G.Christians 2004 The Changing News Paradigm, S.H.Iorio ed. *Qualitative Research in Journalism*, LEA, pp41-56.
- 北田暁大（1998）『「観察者」としての受け手』『マス・コミュニケーション研究』53号、83-96頁。
- 藤田真文（2009）『社会構築主義によるパワフル・メディア論の反転に向けて』『法学新報』中央大学、773-779頁。
- 林香里（2002）『マス・メディアの周縁 ジャーナリズムの核心』新曜社。
- （2005）「訳者解題 ルーマン理論とマスメディア研究の接点」ルーマン著、林香里訳『マスメディアのリアリティ』181-201頁。
- （2011）『＜オンナ・コドモ＞のジャーナリズム』岩波書店。
- 平井智尚（2012）「ウェブに見られるテレビ・オーディエンスと公共性」『戦後日本のメディアと市民意識』ミネルヴァ書房、89-119頁。
- 小林直毅（2003）『「消費者」、『視聴者』、そして『オーディエンス』』小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたか』せりか書房、20-48頁。
- 編（2007）『「水俣」の言説と表象』藤原書店。
- S.ルークス著、中島吉弘著（1974=1995）『現代権力論批判』未来社。
- H.D.ラスウェル著、本間康平訳（1948 = 1968）「社会におけるコミュニケーションの構造と機能」W. シュラム編、『新版 マス・コミュニケーション』東京創元社、66-81頁。
- 森元孝（1995）『モダンを問う』弘文堂。
- （2001）『アルフレッド・シュッツ』東信堂。
- （2005）『アルフレート・シュッツのウィーン』新評論。
- 西原和久（1998）『意味の社会学』弘文堂。
- N.ルーマン著、大庭健・正村俊之訳（1973=1990・2010）『信頼』勁草書房。
- 林香里訳（1996=2005）『マスメディアのリアリティ』木鐸社。
- 大庭健（2010）「訳者解説 I」N.ルーマン著、大庭健・正村俊之訳（1973=1990・2010）『信頼』勁草書房、201-223頁。
- 大井真二（1999）「客観報道の起源をめぐって」鶴木真編『客観報道』成文堂、3-31頁。
- （2004）「マス・コミュニケーションとジャーナリズム」田村紀雄・林利隆・大井真二編『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』世界思想社、34-53頁。
- 大石裕（2011）『コミュニケーション研究 第3版』慶應義塾大学出版会。
- 大石裕編（2012）『戦後日本のメディアと市民意識』ミネルヴァ書房。
- 佐幸信介（2012）「ジャーナリズムにとって相対的自律性は可能か」『ジャーナリズム&メディア』4号、221-234号。
- 桜井均（2001）『テレビの自画像』筑摩書房。
- C.サステーン著、石川憲幸訳（2001=2003）『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社。
- A.シュッツ著、佐藤嘉一訳（1932=2006）『社会的世界の意味構成』木鐸社。
- A.シュッツ著、渡部光・那須壽・西原和久訳（1964 = 1991）『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻 社会学理論の研究』マルジュ社。
- J.Springhall 1998 *Youth, Popular Culture and Moral Panics*, Macmillan Press.
- 平英実・中河伸俊編（2000）『構築主義の社会学』世界思想社。
- 編（2006）『新版 構築主義の社会学』世界思想社。

- 田中耕一 (2003) 「再帰性の神話 —社会的構築主義の可能性と不可能性—」『関西学院大学社会学部紀要』93号, 93-108頁。
- 玉木明 (1992) 『言語としてのニュー・ジャーナリズム』學藝書林。
- 山口仁 (2009) 「ダイオキシン問題とマス・メディア報道」『マス・コミュニケーション研究』74号, 76-93頁。
- (2011) 「社会的世界の中の『ジャーナリズム』」『帝京社会学』24号, 93-117頁。
- (2012) 「ジャーナリズムに関する構築主義的アプローチ」慶應義塾大学法学研究科博士論文。

山口 仁 (帝京大学文学部専任講師)